様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００９～２０１２
課題番号：２１７３０７１３
研究課題名（和文）　ダウン症児・者における作文表現の発達と支援プログラムの開発に関する研究
研究課題名（英文）　Development of compositions and support program in individuals with Down syndrome
研究代表者
菅野　和恵（KANNO KAZUE）
筑波大学・人間系・講師
研究者番号：８０３７５４５１

研究成果の概要（和文）：ダウン症候群においては、読み書き能力（リテラシー）を育てることの有効性が論じられてきた。リテラシーを育てることは、言語的な能力の促進だけでなく、作文や手紙、日記など自分自身を表現することや、他者とのつながりを持つための手段となり、生活の質を高めることにもつながる。ダウン症候群の書記リテラシー、中でもあるまとまりをもつテキストを産出するような作文表現に関する特徴を検討し、支援方法を立案した。

研究成果の概要（英文）：The validity of training and supporting literacy has been indicated in individuals with Down syndrome. Training literacy leads such as not only promotion of linguistic capability but a composition, a letter, a diary, becoming a means for having relation with the others, and enhancing quality of life. The feature about composition expression in individuals with Down syndrome was examined, and the support programs were drawn up.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	400,000	120,000	520,000
２０１１年度	400,000	120,000	520,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：知的障害心理学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：ダウン症候群、知的障害、作文表現、リテラシー、支援プログラム

１．研究開始当初の背景

ダウン症候群は、知的発達の遅れ（知的障害）を伴う染色体疾患である。ダウン症候群においては、リテラシー（読み書き能力）を育てることの有効性が指摘され、その習得が言語機能、中でも発話能力や構音を改善させる可能性や、言語発達支援における効果的なツールとなることが論じられてきた。また、リテラシーを育てることは、言語的な能力の促進だけでなく、読書などの文化的な世界への接点、作文や手紙、日記など自分自身を表現することや、他者とのつながりを持つための手段となることもあり、ダウン症者本人の生活の質を高めることにもつながると考えられる。

リテラシーは、読む能力と書く能力の総称であるが、ダウン症候群の書記リテラシー、中でもあるまとまりをもつテキストを産出するような作文表現に関する特徴や発達に関する報告は非常に限定的である。支援方法

の立案の観点から、さらに細かな段階を設定する必要性が考えられ、評価法を精査した上で、ダウン症候群の作文表現の発達を明らかにすることが求められる。

一方、リテラシーの認知的・言語的基盤としては、メタ認知、推論、談話構造、統語文法、語彙、音韻・つづりに関する知識やステラジーの発達があげられる。また、ダウン症候群の談話研究において、発話による物語産出は、ワーキングメモリとの関連性が指摘されている。

ダウン症候群の作文表現と、メタ認知、推論、談話構造、統語文法、語彙、音韻・つづりに関する知識やステラジー、そしてワーキングメモリの関連性について検討することは、作文表現の発達を支援する糸口を探る上で非常に有用な情報となることが期待できる。

２．研究の目的

本研究は、ダウン症候群の児童・生徒の作文表現の発達を検討するとともに、作文表現の認知的・言語的基盤について明らかにする。また、ダウン症候群の特徴に基づいた作文表現発達支援プログラムを開発することを目的とする。

３．研究の方法

（１）基礎的研究：ダウン症児・者の作文表現に関する研究動向についての基礎的研究を行う。関連文献・資料を収集するとともに、関連研究者と打ち合わせを行い、研究動向に関して整理する。

（２）事例研究：選定した事例に対して、作文表現の発達を検討するとともに、作文表現の認知的・言語的基盤について検討する。

（３）応用的研究：支援プログラムを作成する。作成した支援プログラムに基づき指導を行う。作文表現活動への取り組み状況、作文表現の変化について分析する。この事例研究を通してプログラムの有効性を検討する。

４．研究成果

事例を選定し、背景情報を収集すること、支援プログラムの開発を検討すること、選定した事例に対して、作成した支援プログラムに基づき指導を行うことを中心に行った。

事例に関しては、事例がこれまでに作成した作文を収集し、作文表現の発達的変化を検討した。収集した作文は、小学校１年生から中学校３年生までの９年間にわたって長期にわたる縦断的な検討を行うことができた。

支援プログラムは、STEP1：読解力を育てる、STEP2：表現力を磨く、STEP3：絵や写真を見ながら日記を書く、STEP4：日記を書く、行事の感想文を書く１、STEP5：日記を書く、行事の感想文を書く２（文章の推敲）の５段階で構成された。具体的には、ねらい、道具、進め方、支援のポイントについてまとめている。支援プログラムを以下に示した。

＜STEP1：読解力を育てる＞

〇ねらい

子どもの言葉の理解は、単語の理解から文の理解へ、そして文の理解から文章を理解する読解へと進んでいきます。かな文字読みの学習をはじめる前から、絵本の読み聞かせや大人との会話を通して、言語理解の力を育てていくことが重要です。助詞、助動詞、疑問詞、接続詞とともに、空間関係（上、下、前、後、右、左）や量（いくら、少し、沢山、ぜんぶ）、時間に関わる言葉（最初、最後、前、後）が理解できるようになると、読解の力は高まります。感情や心の状態を示しているような文や文章も積極的にとりあげていきましょう。

〇道具

絵本、動作絵カード、状況絵カード、紙芝居、子どもの体験した出来事を写してある写真

〇進め方

１）生活の中で、絵本のよみきかせをたくさんしましょう。繰り返しのある絵本から、徐々に起承転結のあるような物語構造のある絵本読みにすすめましょう。

２）構文の理解を促しましょう。動作絵が描かれている絵カードを複数枚用意します。「男の子がお水を飲んでいる絵はどれ？」と言って、該当する絵カードを選択させましょう。

３）受動態・能動態の理解（ウサギを追いかけているカメの絵はどれ？、ウサギに追いかけられているカメの絵はどれ？）、否定語の理解（赤色でない鳥の絵はどれ？）を促しましょう。

４）状況、文脈の理解を促しましょう。例えば、お腹をおさえてしゃがみ込んでいる子の絵をみせて、絵の前後に起こることを推測させたり、原因について考えさせたり、子どもの気持ちを読みとったりしましょう。

５）文のつながり、順序、文脈の理解を促しましょう。３枚～５枚程度からなる紙芝居を読んできかせます。その後、子どもに順番をバラバラにした紙芝居を渡し、お話の順に並べさせましょう。あらかじめ、最初の場面の絵は指定しておくなど、並べる枚数は子どもの力にあわせましょう。

６）子どもが体験したことを、複数枚、写真にとります。体験したことを時間的な経過に沿って並べさせたり、状況について質問し、答えさせてみましょう。また、感情や心の状態についても質問してみましょう。

〇支援のポイント

・繰り返しのフレーズがでてきて、なおか

つ物語構造のあるような絵本（「お月様こんばんは（松谷みよ子)」、「三匹のやぎのガラガラドン（北欧民話)」）は、子どもが繰り返しのフレーズをまねしたりなど、読み聞かせに参加しやすいでしょう。

・料理のレシピは、空間関係や量、時間に関わる言葉を理解するのに役立ちます。レシピを確認しながらの料理づくりを通して、構文理解を育てましょう。

・感情や心の状態について理解することが難しい場合は、表情絵カードを作成して、選ばせてみましょう。うれしい、しょんぼり、悲しい、起こっている、楽しい、などがわかりやすいでしょう。

＜STEP2：表現力を磨く＞

〇ねらい

STEP1 の読解力と STEP2 の表現力は、それぞれ別に行うのではなく、読解と表現を関係づけて取り組むことで、相乗的な効果があります。表現させることによって、さらに読解力が高まっていきます。状況を説明できるだけでなく、会話表現を育てることも意識しましょう。はじめは、大人が言ったことをよくききとって、同じ内容になるようにカードで並べたり、カードをヒントにしながら表現したりすることから挑戦してみましょう。

〇道具

単語カード、助詞カード、会話絵、紙芝居、絵本、写真

〇進め方

１）構文の表現を育てましょう。絵にあわせて、単語カードを並べたり、助詞を空欄にした文を示して穴埋めさせたりしてみましょう。大人がいった文をよくききとり、並べたり、穴埋めさせたりすることからはじめてみましょう。構成力を向上させるとともに、助詞を使った文を作る意識が高まります。

２）二人や複数の人間が会話している絵を示します。会話は吹き出しで表現し、吹き出しにふさわしい文を作らせたり、選ばせたりしましょう。あいさつ、許可をとる場面、人に尋ねる場面など、日常生活の中でよく使われる場面にしましょう。

３）紙芝居や絵本を読み聞かせ、その内容について表現してみましょう。複数の文を順序だてて話すために、「いつのことですか」「だれがでてきましたか」「なにをしましたか」「さいごにどうなりましたか」などの質問に答えさせることからはじめてみましょう。

４）体験したことを複数の文で表現してみましょう。体験したことの写真をみて、それについてスピーチさせます。「いつ」「だれ」「なに」「さいご」といった単語カードを見えるところに提示し、カードに沿ってスピーチさせることからはじめてみましょう。

〇支援のポイント

・１）においては、カードの枚数や空欄の数は子どもの力にあわせて設定しましょう。

・２）においては、目上の人にあいさつをしている絵、お隣の席の子どもに消しゴムを借りようとしている絵などがあります。片方の人の吹き出しに、既に言葉を書き込んでおくのも、相手にあわせた表現を考えさせる機会になります。

・起こった出来事を時間や因果関係に沿って整理させ、表現させるだけでなく、感情や心情についても言及しましょう。STEP1 で使用した表情絵カードを使用するとわかりやすいでしょう。

＜STEP3：絵や写真をみながら日記を書く＞

〇ねらい

大人がかいた絵や写真をみながら、子ども自身が体験した出来事を思い出し、文や文章で表現できるようになることをめざします。継続的に取り組みましょう。

〇道具

日記用ノート（枠、補助線入り枠、マス目用紙など)、時間カード、場所カード

〇進め方

１）まず、体験を写真にとるか、大人が絵を描きましょう。その絵や写真をみながら、どんなことを体験したのかを、話し合いましょう。

２）体験したことを文で書いてみましょう。日記ですので、日付をかくことを習慣づけましょう。

３）いつ、どこ、を意味する言葉を入れて表現できるようになることをめざしましょう。あらかじめ、ノートに、「きのう」、「きょう」、「あさ」、「おひる」、「ゆうがた」といった時間をあらわすことば、「がっこうで」「おうちで」といった場所をあらわすことばを記入しておいて、それに続けて書くようにしましょう。

４）「きのう」、「きょう」、「あさ」、「おひる」、「ゆうがた」などの時間をあらわすことば、「がっこうで」「おうちで」といった場所をあらわすことばをカード化し、子どもに選ばせながら、起こった出来事を書きましょう。

〇支援のポイント

・手軽に行えることが、継続させるポイントです。デジタルカメラやデジタルフォトフレームなどのデジタル情報機器を活用しましょう。

・毎日続けていると、題材を選ぶことが難しい日がでてきます。天気、夕食の献立、テレビ番組、着ていた洋服、お手伝い、などでいいのです。

＜STEP4：日記を書く、行事の感想文を書く

１＞
〇ねらい
　子ども自身が体験した出来事を文や文章で表現できるようになることをめざします。大人と共有した体験を題材に選ぶことからはじめましょう。できるだけ継続的に取り組みましょう。毎日取り組むことが難しい場合は、偶数日・奇数日・週末だけでもいいので、定期的に行いましょう。
〇道具
　日記用ノート、作文用紙、てがかりとなるキーワードカード
〇進め方
　１）まず、題材を設定しましょう。何の事柄を書くのか、考えたり見つけたりすることが難しい場合があります。『「したこと、みたこと、きいたこと」を「誰かに」に伝える』という、設定にすると題材をみつけやすくなります。また、最初は、大人と体験した出来事の写真をみながら、その題材のことを思い出しましょう。
　２）決めた題材について、ある場面だけをきりとって表現できるようにしましょう。「いつ」、「どこで」、「誰が」いて、「どんなことをしたのか、どんなこと見たのか・聞いたの」か、について書いてみましょう。これらのことばを、キーワードとしてカード化しておくと、子どものてがかりとなります。
　３）ある一場面に限定した内容から、時間の順序、場所の順序、できごとの順序でたどっていくようにしましょう。その際、２）のキーワードに加えて、「はじめに」、「次に」、「それから」、「おしまい」にということばもキーワードになるでしょう。カード化して提示した上で、書いてみましょう。
　４）順序をたどって書くことができるようになったら、したことだけを記述するのではなく、その時その場で「わたしが（ぼくが）見たこと、聞いたこと、思ったこと」を入れるように促してみましょう。
　５）書いたものを大人がみてほめましょう。ほめることによって、書こうとする意欲が高まり、継続的に書くことにつながります。
〇支援のポイント
　・１）においては、学校であったことをおうちの人へ、家庭であったことを先生へ、お母さんと体験したことをお父さんへ、伝えるということがとりかかりやすいようです。
　・２）、３）、４）について、キーワードを付したスペースを枠でつくり、そのスペース内に書かせると書きやすくなります。
　・５）について、いつも同じほめ方になると、おっしゃられる方がおります。かいたこと（「またかいてきてね」）、かいた分量（「よくこんなにながくかけましたね」）、よくみたこと（「おもしろいことみつけたね、」）、順序よくかけたこと（「よくおもいだしたね」「じゅんばんにくわしくかいているね」）、ていねいにかいたこと（「字をとてもていねいにかけたね」）、などほめるポイントは沢山あります。

＜STEP5：日記を書く、行事の感想文を書く２（文章の推敲）＞
〇ねらい
　書いた文章を推敲する力を高めます。段落構成を考えること、論理的に表現する方法、また、描写表現力を育てましょう。
〇道具
　日記用ノート、作文用紙、てがかりとなるキーワードカード
〇進め方
　１）～４）まではSTEP4と同様です。
　５）書いた文章を大人と一緒に遂行しましょう。
　①文の主述関係や文と文の続き方が正しい文章にしましょう。主語と述語の照応関係を意識させます。「なにが、どうしたの？」と尋ねて整理することが重要になります。
　②文と文の続き方を考えましょう。続けることに便利なことばを使いましょう。前の文の続きを書くときは、「それから」、「そして」、「すると」ということばがあります。前の文と反対のことをかく時は、「だけど」、「でも」、「ところが」、「それなのに」ということばがあります。前の文までのところをまとめるときには、「ついては」、「そこで」、「こうして」、「だから」ということばがあります。
　③場面の様子を詳しく書くようにしましょう。そのとき、その場の「みたこと」、「聞いたこと」、「思ったこと」をできるだけ文中に入れるようにしましょう。
　６）誤字脱字がないか、確認しながら清書しましょう。
〇支援のポイント
　・文と文をつなぐことばを学ぶととても便利です。文カード、接続詞カードを作って、くみあわせて文章をつくってみましょう。

　STEP4の段階の事例に対して支援プログラムに基づき指導を行った。大人とともに絵や写真を見ながら、起こった出来事を共有し、整理していくことを援助する方法として、デジタル情報機器を活用したり、時間を意味することばを示したカードや場所を示すカードを選ばせるといったプロセスをいれたりすることが有効であることが示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 菅野和恵、村井方子、根本文雄：知的障害のある生徒の作文表現を育てる－事前質問の効果－．筑波大学学校教育論集、査読有、31 巻、13-20、2009

〔学会発表〕（計２件）

① 菅野和恵：自主シンポジウム　発達障害児の学習支援・コミュニケーション支援のためのアセスメント法の開発－学齢期の言語コミュニケーション能力評価の新たな提案と試行に向けて－、記憶能力と言語能力の視点から．日本教育心理学会第 52 回大会　、2010 年８月、早稲田大学

② 福田麻子・菅野和恵：ダウン症幼児における数の三項関係の形成と模倣による積木構成―事例による指導経過―．日本特殊教育学会第 48 回大会、2010 年９月、長崎大学

〔図書〕（計２件）

① 菅野和恵：新ダウン症児のことばを育てる（池田由紀江他編著）．ことばの発達の良好なダウン症の事例。福村出版、2010 年、177 頁。

② 菅野和恵：ダウン症ハンドブック改訂版（橋本創一他編著）．　生涯発達支援プログラム：Ⅱ児童期　６．作文の力を育てる．日本文化科学社、2013 年、256 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

菅野　和恵（KANNO KAZUE）
筑波大学・人間系・講師
研究者番号：８０３７５４５１